



小島軍造先生を偲んで

讃 岐 和 家

私たちの敬愛する小島軍造先生は、1972年3月に本学大学院教授を定年で御退任後、73年3月まで客員教授として大学院に御出講の後、高崎市立図書館長として高崎市へお移りになられた。その後、座骨神経痛でしばらく療養になられ、御回復後はお宅で静養のかたわら、読書と研究の日々を送っておられたが、昨年10月、病の床につかれ御加療中のところ、去る8月30日、長逝された。1953年7月、開学後間もない本学の教育哲学の教授に御就任後、教育哲学研究室の主任として精力的に民主主義に基づく教育哲学の解明に当られ、また教養学部と大学院での研究と教育および私たち後進の指導に尽力してこられた先生を失なったことは、私たちの痛恨の極みであり、全く途方に暮れる思いである。先生のなみなみならぬ研究教育上の御労苦と、後進へのあたたかい御配慮を思い、心からの御礼を申し上げるとともに、御霊の御冥福と御遺族の御平安を切にお祈りする。

小島先生の御略歴と御業績は本教育研究第16号に記載されている。先生は1901年、高崎市にお生まれになり、高崎中学校、第三高等学校を御卒業の後、東京帝国大学に進まれた。大学では初め英文学科に在籍されたが、御自分の関心がむしろ倫理学と社会哲学にあることを自覚して倫理学科に

転科され、1928年にここを卒業された。その後1年間、河合栄次郎氏の個人助手をつとめられた後、1929年からフンボルト基金給費生としてドイツで広く哲学的諸学問を研究された。御帰国後2年間、日本大学その他で講師をつとめられた後、1934年以降は京城帝国大学に奉職され、1939年以降は教授であられた。1945年、終戦に伴ない、郷里に引きあげられて、高崎市立図書館長、同市助役、群馬県地労委会長、および群馬県教育長を御歴任の後、1953年7月本学教授になられ、研究者・教育者としての御生涯の後半を本学にささげて下さった。この間、1961年からケ1年間をフルブライト研究員としてハーヴァード大学で送られ、1962年には東京大学から文学博士号をお受けになり、また1975年に本学名誉教授となられた。

小島先生の御業績としては、『文化行政と世界観の問題』、『民主主義教育の哲学的基礎づけ』、および『民主主義の倫理と教育』の3冊の御著書・編著書と、約30篇におよぶ長文の論文がある。これらの御業績は、京城大学御在職時代、地方教育行政時代、および本学御在職時代の3つの時期に分けることができるように私は思う。

京城大学御在職時代は昭和10年代に当る。この時代に小島先生が関心をもたれた問題は、次第に高まる民族独善主義の風潮であった。この風潮の中にあつて先生は、「道德一般も、従つて民族の道德性も、何等か世界的、客観的なものを前提とすることなしには成立しない点を主張して、民族的独善主義を排撃しよう」と試みられた。また、このような困難な時代にあつて、学者は「時代の要請に対し、又は民族の運命に関して、何等か積極的、建設的であるべきこと、本質的意味に於て《真実》を行う《勇氣》を持つべきである」ことを主張された。

敗戦後約7年間、小島先生は、このような使命観をもつて戦後の困難な地方行政、とくに地方教育行政に尽くされた。この時代は窮乏のはなはだしい時期、また諸価値の転倒の時期であり、その時期において、労働問題の解決、教育行政の民主化、地方分権化、教育の自主性の回復といったなれない仕事と取り組むことは筆舌につくしがたい御苦勞であつたと思う。

この期間に「哲学しつつ行政」しておられた先生は、約20篇の論説を雑誌に寄稿しておられる。『文化行政と世界観の問題』に集録されているこれらの論説で先生が一貫して主張しておられることは、文化的いとなみの中で客観的・超越的な理法を承認し尊敬することの必要性についてである。このような理法を先生は「客観的理性」、「世界理性」と呼んでおられる。「真の文化は畢竟、客観的理性の承認に出発する。世界国家の理念も世界人の理想も客観的なる世界理想の承認の上に成立する。我々の世界観は、かかる視点から再検討され、再組織される必要があると思う。」

1953年に本学教授に就任され、再び書齋人となられた先生は、このような視点から、新生日本のための民主主義教育哲学の諸原理を解明することにひたすら邁進してこられた。『民主主義教育の哲学的基礎づけ』、『民主主義の倫理と教育』、および本教育研究その他に所載の一連の論文はすべてこの課題をめぐるものである。

小島先生は広く古今東西の思想を勉強されたが、とくに強い影響を受けたのは、西欧ではジェーラー、カント、ウェーバー、ヤスパース、フランクフルト、およびデューイ、わが国では和辻哲郎教授および金子武蔵教授からである。先生はこれらの思想家の著作に親しみ、そこから摂取すべきものを摂取されて、御自身の教育哲学として展開してこられた。先生の教育哲学の基本原理は、『文化行政と世界観の問題』の序で書いて居られるように、カントの理想主義を中核とする広いヒューマニズムであった。1971年の最終論文で書いておられるように、この原理の展開として、先生はプラグマティズムと理想主義を総合することを目指しておられた。

研究者としての先生は、宇宙の根本的な理法への繊細な感受性、柔軟でかつ厳密な思考力、一貫した課題意識、および止むことのない研究心を持ち続けられた。先生のこのような御資質から私たちが学ぶところは大きい。先生の研究者としての御資質にならいつつ、先生の遺された知的遺産を継承し、さらに発展させてゆくことが私たちの課題であると思う。